雷神の憂鬱

春日井

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雷神の憂鬱

【Ｎコード】
Ｎ５９７４Ｍ

【作者名】
春日井

【あらすじ】
なんでこうなった！告白を断り続けて苦節ウン百年、早く諦めてくれないかと願う雷神と狙った獲物は逃がさねぇな俺様何様ゼウス様のお話

前篇（前書き）

この作品には〔ボーイズラブ要素〕が含まれています。
苦手な方はご注意ください。

前篇

自室にて雨音を子守唄に瞼を落としてはうとうとと微睡み、眠っているとざわりと空気が震えた。なんだと薄らと目を開ける。＞ｂｒ＜「いい眺めだなぁ、ライ？」＞ｂｒ＜「ゼウス様・・・・・どうやって・・・」＞ｂｒ＜入ってきたのだと、イタリアンスーツに身を包んだ美丈夫を警戒しつつ見上げた。仮にも神の暮らす庵だ。周囲には結界が張られ、従者も居る。それを掻い潜ってここまで来るのは容易ではないはずだ。そう易々と入り込める場所では無かったはずだ。それをこの男神はあっけなく破ってきた。＞ｂｒ＜「俺を誰だと思ってやがる・・？」＞ｂｒ＜「・・・全知全能の神と仰りたいんでしょう？」＞ｂｒ＜分かっていたがこうもあっさり攻略されてしまうとこちらの立場が無いと溜息をつく。いつまでも畳に伏せているわけにもいかず身を起こし、乱れた着物の裾を正し、ぐしゃぐしゃになった髪を手櫛で整える。もったいねぇなぁとのたまうゼウスを一睨みした。＞ｂｒ＜「最高神なら無断でよそに入っていいってのは理由にはならんでしょうが。少なくとも玄関から入るっていう礼儀ぐらい弁えていただきたいんですがねぇ？で、何の用ですか？」＞ｂｒ＜「返事は？」＞ｂｒ＜「またそれですか？・・・“いいえ”ときっぱり断ったはずですが」＞ｂｒ＜「いいえだぁ？馬鹿言うんじゃねぇよ。俺はＹＥＳ以外聞かねぇつったろうが・・・・なぁ、いい加減に俺のモノになれ」＞ｂｒ＜好きだろう？俺のこと、と偉そうにいっそ清々しいまでに言い切った。その目には獰猛な光が宿っていた。嫌な目だと思う。上に立つ者独特の傲慢さが滲み出るどころか、溢れ返っている。＞ｂｒ＜「好きなわけ無いでしょう。第一、何回も言ったと思いますがね、俺は不倫はしない主義なんですよ。正妻どころか愛人も五万といるような方のところへ行く予定は無いんで、さっさと諦めてくれやぁしませんか？」＞ｂｒ＜何百年と同じ内容を言い続けることにうんざりする。なんでこん

なことになったのだろうと深い溜息をついた。＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜
時をさかのぼること事、人の世では群雄割拠して、多くの者が我こそはと自らの覇を貫かんとしていた時のことだ。外国から宣教主と呼ばれる者たちが入ってきた。そこで会ったのだ、後々の頭痛の種に。
＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜
物珍しい品々が並び、見慣れぬ格好をした人々が歩き回っている。その喧噪の中を男が歩いていた。成人しているだろうに髷の結わず、だらりと長い髪を下の方でまとめている。そんな奇妙な男を生真面目そうな男が後を追っていた。＞ｂｒ＜「主様、あまり一人で出歩かないでください」＞ｂｒ＜「んー・・・」＞ｂｒ＜「聞いていらっしゃいますか！？」＞ｂｒ＜「そう気を張り詰めなくともいいだろう。なぁ？梅吉」＞ｂｒ＜「そうですね！松助さんは心配しすぎですよ」＞ｂｒ＜カラカラと彼らより幼い顔立ちをした男が笑う。＞ｂｒ＜「しかし、最近見慣れぬ者がこの国に入り込んだと聞きます。用心に越したことはありません。」＞ｂｒ＜「ああ、外国の神かでうすとか言ったか？向こうの最高神だそうだ」＞ｂｒ＜「ですから気を付けて」＞ｂｒ＜くどくどと続く小言は右から左に抜けていく。この時、もう少し松助のことを聞いていれば少しは状況は違ったかもしれなかった。＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜

＞ｂｒ＜ぼんやりと月を見上げ、酒を呷る。人の賑わう町は今、魍魎や妖で賑わっていた。楽しそうな事だと天守閣から下を見下ろす。＞ｂｒ＜「ん？」＞ｂｒ＜ゴロゴロと空が鳴った。雷光が夜空を走る。建御雷は訝しげに空を見上げた。今、この地で自分以外に雷を鳴らすような神はいなかったはずだ。じっと空を見上げていると影が見えた。その影めがけて雷を放つ。＞ｂｒ＜「避けられたか」＞

ｂｒ＜雲は見事に割れているが、肝心の影の主が見えない。どこだ、と探していると後ろから物凄い力で屋根に引きずり倒された。＞ｂｒ＜「・・・・ッ・・」＞ｂｒ＜「あ？・・・・てめぇも神か？」＞ｂｒ＜「誰だ・・」＞ｂｒ＜「俺を知らねぇとはとんだ田舎者の神も居たものだな」＞ｂｒ＜金の髪に深い青い目をもつ男神は嘲笑う。＞ｂｒ＜「・・・ああ、最近入ってきた神か。たしか・・でうすか？」＞ｂｒ＜「この国の人間はそう呼ぶな、だがゼウスだ。全知全能の神、最高神であるゼウスだ」＞ｂｒ＜覚えとけ、と言うが早いか雷が建御雷に落ちた。＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜

さっきまでやたらと雷が鳴っていたが自分の主人に何かあったのかと思っていると、ドンドンドンと戸を叩く音が聞こえてきた。あわてて玄関へ向かい、鍵を開ける。そして絶句した。＞ｂｒ＜「今、帰った」＞ｂｒ＜「あ・・主様ッ・・・！」＞ｂｒ＜長く艶やかな黒髪は所々焦げていたり、ザンバラに短くなっており、服もあちこち破けている。なにより血臭が彼の身体から漂って来ていた。＞ｂｒ＜「何があったのですか！」＞ｂｒ＜「あー・・・お前が気にすることじゃねーよ」＞ｂｒ＜「しかし！」＞ｂｒ＜「気にするなと言った。それよか明日の早朝に天照の所へ出掛ける。」＞ｂｒ＜風呂は沸いているか？と中へ入っていく建御雷に唇を噛む。＞ｂｒ＜「ちょっと、ボロボロじゃないですか！」＞ｂｒ＜「ボロボロって言うんじゃねーよ。そんなことより風呂沸いてるか？」＞ｂｒ＜触れるなと言われれば自分はそれに従うしかない。それが松助には非常に悔しかった。しかし、それをぐっとこらえると主のために動き出す。＞ｂｒ＜「沸いているわけ無いでしょう？今、何刻だと思っているんですか」＞ｂｒ＜「お、俺入れてきます！」＞ｂｒ＜「藤丸か月白に手伝ってもらいなさい。それから小萩に此方へ来るようにと」＞ｂｒ＜分かりました、と梅吉が風呂場の方へ走っていく。ふぅ、と一息つくとぼんやり空を眺めている主に向き直った。＞ｂ

ｒ＜「主様」＞ｂｒ＜「ん？風呂か？」＞ｂｒ＜「いいえ、風呂は今、梅吉たちが準備しているところです。」＞ｂｒ＜「松助さん、お呼びですか？」＞ｂｒ＜「風呂より先にそのみっともない髪をどうにかしましょう」＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜

「・・・はぁ・・」＞ｂｒ＜湯船に浸かり、ほっと息をつく。熱い湯に傷口がピリっとしみた。それに伴い先ほどまでの攻防を思い返し、顔をしかめる。＞ｂｒ＜「ゼウスねぇ・・・」＞ｂｒ＜あの強さは反則だろうと思う。最高神という地位に就いていたとしても、こちらも軍神として闘いで遅れを取るつもりはないし、なによりここは自分の領域であったのだ。向こうにとって力を出しにくい土地であったはずだった。それなのにお互いに本気で無かったとはいえ、負けずとも勝てなかったのは問題だった。これを聞いて天照はどう動くだろうか。＞ｂｒ＜「タケミナカタは五月蝿いだろうな」＞ｂｒ＜高天原に居ないことを願った。
＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜

前篇（後書き）

現時点でくっつくかくっつかないかは決まっていません。それに他の神様もだしたいなぁ・・・

誤字脱字ありましたら遠慮なく指摘ください。ここまで読んでいただきありがとう御座います。

後篇（前書き）

この作品には〔ボーイズラブ要素〕が含まれています。
苦手な方はご注意ください。

後篇

＞ｂｒ＜
「・・・・話は分かりました」＞ｂｒ＜昨晩についての報告と謝罪を天照にする。彼女の表情は固かった。＞ｂｒ＜「私も彼の神が入ってきたのは知っていました。ですが、それだけであった事も事実です。ですので貴方が彼の神に対して行った行為については、今は不問としましょう。そして、彼の神への我らの対応としては・・・・・・誰ですか」＞ｂｒ＜天照は言葉を切ると立ち上がった。強大な力が突如として現れたのだ、周囲にも緊張が走る。＞ｂｒ＜「初めまして？女神殿」＞ｂｒ＜扉の影から昨晩の男神‐ゼウス‐が姿を現した。思わず建御雷は顔を強張らせ、刀に手が伸びる。＞ｂｒ＜「初にお目にかかりますね、ゼウス殿。私は天照と申します」＞ｂｒ＜「お堅いな・・・ま、しばらく邪魔するから覚えておいてくれ」＞ｂｒ＜なぁ？とゼウスは建御雷の方を見る。＞ｂｒ＜「触れを出しておきましょう。そして、我々に害がなのであれば今は歓迎しましょう」＞ｂｒ＜「今は・・か」＞ｂｒ＜「先の事は私も見えません」＞ｂｒ＜天照の言い分に面白そうに笑うとゼウスは入ってきたとき同様、勝手にその場を辞した。周囲は彼の行動に顔を顰め、中には文句を言っている者さえいる。随分とこの短時間で嫌われたものだと建御雷は呆れる。＞ｂｒ＜「あの者は・・・かつての弟に似ていますね」＞ｂｒ＜力は比べようもありませんが、と天照はつぶやいた。＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜

「よぉ・・」＞ｂｒ＜天照の宮を出ると、門のところにゼウスが立っていた。＞ｂｒ＜「ゼウス様・・・」＞ｂｒ＜「様なぁ・・・昨夜の不遜な態度はどこへ行った？」＞ｂｒ＜「昨晩は失礼しました」＞ｂｒ＜「気にしてねぇが・・・・だが、今の態度は気にくわねぇ

なぁ」＞ｂｒ＜面白くなさそうに舌打ちされる。＞ｂｒ＜「無茶を言わないでくれませんか。昨晩と違い、貴方は今は天照の客です。」＞ｂｒ＜「そうかよ・・・まぁ・・追々変えてくれりゃいい、今はな。それより、お前」＞ｂｒ＜気にいった、と酷く男くさい笑みを浮かべる。＞ｂｒ＜「俺のモンになれ」＞ｂｒ＜「・・・・は？」＞ｂｒ＜事態が飲み込めず、呆気に取られた顔で自分より幾分か高い位置にある顔をただ見上げる。＞ｂｒ＜「俺のネコになれ」＞ｂｒ＜耳元へと、熱っぽい吐息が柔らかく吹き込まれ、あわてて距離を取ろうとすれば、動く前に建御雷はゼウスの太い腕にからめとられた。押し返すも体格差にものを言わせて馬鹿力に抑え込まれてしまう。＞ｂｒ＜「てめぇの啼く声に喘ぐ顔に興味がある。気位の高けぇお前の顔が快楽に歪んで懇願する様が見てぇなぁ・・」＞ｂｒ＜馴れ馴れしくもゼウスの腕は彼の腰に回わされ、ぐっと距離が近くなる。その無遠慮さに建御雷の整った面差しは徐々に剣呑さを増した。＞ｂｒ＜「屈辱だろう？見下ろされることもなけりゃあ、啼かせれることもなかったろうしな。軍神のてめぇを抱こうなんざここの神は考えもしねぇだろう、ここの神はお上品な奴らが多いからなぁ」＞ｂｒ＜そう言った直後、建御雷の中から天照の客だとか格上の存在だとかに対する遠慮はその瞬間、遥か彼方に消え失せた。腕を振りほどき、不快な顔を殴り飛ばす。＞ｂｒ＜「・・・ッ・・」＞ｂｒ＜「不愉快だ」＞ｂｒ＜「・・・っは、とんだじゃじゃ馬だな」＞ｂｒ＜建御雷の逆鱗に触れたその表情さえもゼウスにとっては愉快な出来事でしかないらしい。めげることなく、彼の両腕は建御雷を捕らえんと伸びてくる。両腕を払い落し、建御雷はゼウスを睨みつけた。＞ｂｒ＜「ネコはおとなしく・・・俺の下で啼け」＞ｂｒ＜さっきの戯れのような速度とは違い、一瞬で建御雷の腕を掴むとそのまま壁に叩きつける。その衝撃により出来た隙に建御雷は唇を口付けによって塞がれていたのだった。一瞬の怯みを突いて唇へと割り入った舌先が建御雷のへと入ると、それは嬉々として咥内を蹂躙する。静寂の中、時折微かに響く水音に羞恥が湧いた。＞ｂ

ｒ＜
＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜
絶景だな、とゼウスは建御雷を見下ろす。眉根を寄せる面持ちが耐えるような、それでいて艶を帯びるようななんとも言えぬ表情を浮かべ始める様子は、予想以上にゼウスを楽しませる。女には最近、飽いてきた所だった。最高神である自分に対しての彼らの態度はやや食傷気味だったのだ。そこに遠い異国は渡りに船とばかりにゼウスはこの国にやってきた。もの珍しい文化に国を飛び回っているところに現れた建御雷はゼウスの絶好の獲物だった。執拗と言っていい口付けが終わらせ舌先を引き抜く、後引く濡れた唇を軽い口付けで拭う時には、ゼウスのその口元には更に深い笑みが宿っていた。逃がすものか。＞ｂｒ＜「なぁ・・・タケミ・・否、“Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ”」＞ｂｒ＜「ライ・・・何？」＞ｂｒ＜荒い息を隠せず、それでも仄かに上気した目許をきつく睨みつけてくる様は可愛らしいとしか言いようがない。＞ｂｒ＜「俺の武器は雷だ、なら雷神であるお前こそ俺の隣に立つに相応しい」＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜

だから＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜

「抱かせろ」
＞ｂｒ＜せいぜい俺の手の中で乱れて見せろ。＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞
ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜

思えば、あれがいけなかった。押すに押され、雰囲気に流され肌を重ねたのがあの神を助長させることになってしまったのだ。＞ｂｒ

<「・・・・はぁ・・」>ｂｒ<溜息が洩れる。ゼウスが帰り、ガランとした自室に建御雷は再び寝転がる。そこへ遊びから帰ってきた雷獣がじゃれついてきた。>ｂｒ<「あれは釣った魚に餌をやらねぇタイプだしなぁ・・・」>ｂｒ<雷獣を抱きしめながら、建御雷は低く唸った。堕ちた瞬間に捨てられるなんざ冗談ではない。>ｂｒ<「主様・・」>ｂｒ<松助が荒れに荒れ果てた部屋を片付けるためにやってきた。そしれあまりの惨状に溜息が出る。>ｂｒ<「毎度毎度、部屋を破壊するのはやめて下さいませんか」>ｂｒ<満足に花器も置けない、とぼやく。>ｂｒ<「部屋より俺への心配は無いのか」>ｂｒ<「大丈夫で御座いますか？」>ｂｒ<「・・・・・・・大事ない」>ｂｒ<素気無くあしらわれて建御雷は深い溜息をついた。>ｂｒ<「早く・・・諦めてくんねーかなー・・」>ｂｒ<俺が踏ん張れているうちに・・・>ｂｒ<>ｂｒ<>ｂｒ<>ｂｒ<>ｂｒ<>ｂｒ<空に稲妻が走った。>ｂｒ<

後篇（後書き）

これで今後の主軸の前提の話が出来たかな・・？やっぱり文章を書くのは難しいなぁ

誤字脱字ありましたら遠慮なく指摘ください。ここまで読んでいただきありがとう御座います。

水無月の頃（前書き）

紫陽花の花言葉

「移り気」「高慢」「辛抱強い愛情」「あなたは美しいが冷淡だ」

「浮気」「自慢家」「あなたは冷たい」

水無月の頃

「じゃあ、ちょっと出掛けてくるわ」＞ｂｒ＜「お帰りはいつになりますか？」＞ｂｒ＜「そう長居するつもりはねぇよ」＞ｂｒ＜真っ赤な番傘を差した建御雷は従者に見送られて屋敷を出た。梅雨に入って、しとしとと雨が降る。下界では異常気象だなんだと騒がしいらしいが、ここは概ね例年通りだった。彼の心内以外は・・・。＞ｂｒ＜「雷神様、お出掛けですの？」＞ｂｒ＜振り返るとそこには傘も差さずに立つ女がいた。だが、雨に濡れてみすぼらしく見えるわけではなく、雨粒が髪飾りのように彼女の美しさを引き立てていた。＞ｂｒ＜「ああ、少し神に会いに行く」＞ｂｒ＜「そうですか・・」＞ｂｒ＜その顔はどこか不満そうだ。なぜ？と首を傾げる。何か気に障る事をしただろうか悩んでいると見事な紫陽花の群生が目についた。なるほどと頷く。＞ｂｒ＜「綺麗に咲いてんなぁ・・」＞ｂｒ＜「ふふ、ありがとうございます」＞ｂｒ＜クスクス嬉しそうに女は笑う。それは正に花の咲くが如しの美しい笑みだった。＞ｂｒ＜

＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜

鬱蒼とした林を抜けた先にある屋敷の門を叩く。間もなくして勝手戸が開き、従者が姿を見せた。＞ｂｒ＜「これはこれは建御雷様」＞ｂｒ＜「クラオはいるか？」＞ｂｒ＜

＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜

＞ｂｒ＜先導され客間で待っていると茶菓子と共にクラオカミが入ってきた。＞ｂｒ＜「水羊羹か・・・」＞ｂｒ＜「久しぶりの一つもないのか？」＞ｂｒ＜はぁ・・と溜息をつくと自分も座る。建御雷は遠慮の欠片もなく菓子を食べ、茶を飲んでいた。＞ｂｒ＜「私の所にタカリに来たわけ？」＞ｂｒ＜「・・・・・どうやったら諦

めてくれると」＞ｂｒ＜「知らん」＞ｂｒ＜「少しは考えてくれてもいいんじゃねぇの？」＞ｂｒ＜つまらなさそうに建御雷は言うと、クラオカミの分の水羊羹にまで手を伸ばす。兄弟故か建御雷が彼女に遠慮することは無い。＞ｂｒ＜「無駄でしょうよ。あの男は兄さんにやたらと執着してるし、もうなんか意地みたいになってる部分もあるだろうし」＞ｂｒ＜諦めて付き合えば、と言えば嫌そうに顔を歪められた。そんなに嫌なの、と言えば、ふいっと顔を背けられる。＞ｂｒ＜「もう一度、鎖国しねぇかな」＞ｂｒ＜鎖国中は例の宗教もこの国で彼の神が自由に動けるだけの力を与えなかった。それゆえに訪問回数もぐんっと減り、建御雷も心中穏やかに暮らせていたのだ。開国すると聞いた時はこれからを思い、大いに嘆き悲しんだ。だから、建御雷は開国する原因となった黒船が大嫌いだった。＞ｂｒ＜「・・・鎖国したところで、ウチは宗教の自由を認めているんだから無意味だろうさ」＞ｂｒ＜言いたいことはわかるが、とクラオカミは言う。＞ｂｒ＜「あー・・・」＞ｂｒ＜とうとう突っ伏してしまった。これを見て誰が軍神だと思うだろうか。うめき声を上げる建御雷の頭を撫でながら、クラオカミは苦笑した。＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜

＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜いつまでも客間に居るのもなんだからと片付けを頼み、二人はクラオカミの自室の方へ場所を移した。障子を開けた所から外が見え、雨上がりの庭が一望できた。しばらくぼんやりと外を眺めていた所へクラオカミは建御雷にいつも疑問に感じていた事をぶつけた。＞ｂｒ＜「ところで、兄さんが付き合いたくないっていうのはよく知っているけれど・・・どこが嫌なの？」＞ｂｒ＜「・・・・・え？」＞ｂｒ＜「あの男・・最高神として建御雷はクラオカミを見上げた。＞ｂｒ＜きょとんとして権力あるし、容姿も良いし、力も兄さんを組み敷くぐらいだからかなりあるでしょう？まぁ、浮気症で妻子持ちっていうマイナス部分を合わせてもけっこう良いと思うけれど」＞ｂｒ＜ごろんと寝転がっている建御雷を見降ろしてクラオカミは言った。＞ｂｒ＜「浮

気症で妻子持ちが問題なんだろうが」＞ｂｒ＜「へぇ・・・じゃあ、他はいいのね？」＞ｂｒ＜念を押すように言うと建御雷は押し黙った。どこか苦虫を噛み潰したような顔をしている。＞ｂｒ＜「つーか・・よく知らねぇんだよなぁ・・」＞ｂｒ＜「はぁ・・？５００年以上もあんな・・」＞ｂｒ＜「うーん・・・犯された記憶と迫られた記憶とそんくらいか？・・・どういう奴かって知る間も無ねぇな」＞ｂｒ＜「・・・・・・」＞ｂｒ＜言葉も無かった。＞ｂｒ＜「どうした？」＞ｂｒ＜「兄さんは・・・それでいいの」＞ｂｒ＜「・・・・・さぁ・・？」＞ｂｒ＜「兄さん！」＞ｂｒ＜焦ったようなクラオカミに建御雷は薄く笑みを浮かべる。＞ｂｒ＜「そろそろ帰るわ」＞ｂｒ＜体を起して乱れた着物の裾を整えると、追及から逃げるように言った。そして、さっさとクラオカミを置いて玄関へ向かった。＞ｂｒ＜「お帰りですか？」＞ｂｒ＜「邪魔をしたな」＞ｂｒ＜「いいえ、我が主は貴方様が訪れると嬉しそうになさいますから、もっとゆっくりなさっていけばよろしいのに」＞ｂｒ＜「また来る」＞ｂｒ＜建御雷はそう言うと、帰って行った。＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜

「はぁ・・」＞ｂｒ＜クラオカミの屋敷からの帰り道、建御雷は後悔をしていた。あんな事まで言うつもりではなかったのだ。いらん事を言ってしまった、と溜息をつく。そして、気づけば行きしなに見かけた紫陽花の咲く通りにまで来ていた。しかし、今度は女の姿は無かった。代わりにゼウスが待ち伏せるように立っている。＞ｂｒ＜「よう、ライ」＞ｂｒ＜「・・あんたは紫陽花みたいな方ですねぇ」＞ｂｒ＜「はぁ？」＞ｂｒ＜訝しげる男に建御雷はなんでもないと笑う。＞ｂｒ＜「ところで、たまには趣旨を変えて酒でも飲みませんか？」＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜

雨は上がり、夕日に照らされ紫陽花はキラキラと輝いていた。＞ｂ

r
<
>
b
r
<

水無月の頃（後書き）

クラオカミ：貴船神社に祭られている龍神様

物語は梅雨ですが、夏真っ盛りですね。強い日差しに汗が止まりません。あの豪雨はなんだったんだと言わんばかりの快晴です。

誤字脱字ありましたら遠慮なく指摘ください。ここまで読んでいただきありがとう御座います。

葉月の頃（前書き）

この作品には〔ボーイズラブ要素〕が含まれています。
苦手な方はご注意ください。

葉月の頃

ドォンッドォンッと花火が打ちあがり、街が人々の祭りで賑わっている中、人工の光が一つもない山の中腹にある庵に彼らはいた。月と星明かりに照らされ、恰幅の良い巨漢と銀色の衣を纏った青年が手酌で酒を飲んでいた。＞ｂｒ＜「こんばんは、月読様・大山様」＞ｂｒ＜そこへ着流しを着た青年が徳利を片手にやってきた。＞ｂｒ＜「遅いぞ、建御雷。あまりに遅い故、先に始めておった所だ」＞ｂｒ＜「すいません」＞ｂｒ＜「気にするな、この親父はただ酒が飲みたいだけだからな」＞ｂｒ＜そうですか、と建御雷は笑って月読の隣りに腰を下ろした。そして杯を受け取るとなみなみと酒を注いだ。＞ｂｒ＜「元気そうだな？」＞ｂｒ＜「おかげさまで」＞ｂｒ＜「ところで、あの男に応える覚悟は出来たのか？」＞ｂｒ＜ニヤニヤ笑って月読がそう言えば、大山もどうなのだ？と聞いてくる。建御雷はおもわず顔をしかめた。＞ｂｒ＜「覚悟って何ですか・・・第一、応える前提の質問は止めてくれません？」＞ｂｒ＜「断る。俺はアルテミスと賭けているからな、止めてやるものか」＞ｂｒ＜「・・・・悪趣味ですねぇ」＞ｂｒ＜「ちなみに俺は応えるに賭けているからな？」＞ｂｒ＜解っているな？とのしかかって来た。知りませんよ、とじと目で睨みつける。＞ｂｒ＜「そうカッカするな、建御雷。月読もせっかくの花火だ、見てやらねばもったいない」＞ｂｒ＜そう言って二人の杯に酒を注ぎ、肴を勧めてくる。そう言われてしまえば一人怒っているのも空しい。溜息を一つ落としてぐいっと酒を呷り、空に目を移した。空には次々に花火が上がり、夜の闇を一瞬だけ薙ぎ払ってあっという間に空に散っていく。朝顔や星といった形の花火が上がる。ここ最近、変わった花火が増えてきた。人の技術の躍進にはハッとさせられると思った。＞ｂｒ＜「・・普段もあれの半分でも人が訪れれば良いのだがな」＞ｂｒ＜大山がぽつりとつぶやく。ふと、街を見れば、提灯や夜店の光でひときわ

明るい場所が見えた。人がごった返し、それでも楽しそうな賑わいを見せている。＞ｂｒ＜「我々が望んでどうにかなるものでもないだろう・・・なによりあの神は良い方だ。」＞ｂｒ＜祭りの所からそう遠くない所に社が見える。祭りのある神社の神と違い、どこか儚げな姿が見えた。それを見て、月読は言う。＞ｂｒ＜「・・・増えましたね」＞ｂｒ＜「増えたのぅ・・・かわいそうに多くの神がここで生きていけなくなってしまった」＞ｂｒ＜「それ以上にどれだけのものが消えたのやら・・」＞ｂｒ＜見当もつかん、と月読は溜息をついた。信仰や依り代を無くした無くした者は下界に留まることは出来ない。神無月の吹く風に乗り、出雲から高天原まで上がるか、消えてしまうかだ。誰も参らず、朽ちて行った社の主や埋められた川の主、削られ消えていった小山に住む多くの者が神無月を待てずに下界から文字通り姿を消した。＞ｂｒ＜「闇が減ったと言って魔都に移る者も多いな」＞ｂｒ＜ここ数十年で、高天原の住民や魔都の住民は急増している。消えてしまう前にと神や精霊、妖たちが高天原や魔都に移ってきている。＞ｂｒ＜「時の・・時代の流れというものかのぅ・・」＞ｂｒ＜花火が上がって消えた。＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜

「・・・・ふぅ・・・」＞ｂｒ＜少々暗い話題も出たが概ね良好に終えた酒宴の帰り道、建御雷は門の所に立つゼウスを見つけた。目が合うともたれていた手摺から身を起こし、ゼウスがゆっくり近付いてきた。それを見て月読はにやっと笑った。そして・・・＞ｂｒ＜「旦那も居ることだし・・なぁ？大山」＞ｂｒ＜「そうだのぅ」＞ｂｒ＜月読たちは一つ肯くとわけの分からない理由を持って建御雷を置いて歩いて行ってしまう。＞ｂｒ＜「え、ちょっと！」＞ｂｒ＜「待て」＞ｂｒ＜腕を掴まれ動けなくなった。その間に月読たちは追いつけない所まで行ってしまった。＞ｂｒ＜「ごゆっくりって・・・」＞ｂｒ＜「この俺を放ったらかしにして・・・他に現を抜かすとは随分つれねぇじゃねぇか」＞ｂｒ＜「誰と一緒に居ようが俺の勝手かと思いますが？」＞ｂｒ＜「そうだとしてもだ、俺が

誘っても頑として縦に振らぬてめぇを、自国の神と言うだけであっさりと酒の席に着かせる。これほど俺のプライドを刺激する事もないだろう？」＞ｂｒ＜剣呑な光をした目を向けてゼウスは言った。＞ｂｒ＜「そんな事で俺に当たらんでもらえます？貴方は俺を狙ってるんでしょうが、下心のあるそんな男の所にそうホイホイとついて行けるわけがないでしょう」＞ｂｒ＜前提が違うってことぐらい理解してほしいんですがね、と建御雷はややうんざりしたように言う。ただ酒を飲むだけで終わらないような所に何故自分から行かなければならないのか冗談じゃないと思う。＞ｂｒ＜「・・・・・」＞ｂｒ＜しかし、剣呑な光は消えない。このままでは半刻もせずにどこかの茶屋に連れ込まれて朝までコースになりそうだな、と深い溜息をついた。＞ｂｒ＜「花火でも見て・・納涼でもしますか？」＞ｂｒ＜機嫌の悪いままだと何されるか分かったものじゃないと思い、ご機嫌を取る意味で花火に誘った。こういう行動に出るあたりゼウスに慣らされてきているなと思う。＞ｂｒ＜「もう終わったんじゃねーのか？」＞ｂｒ＜「そりゃ下界の祭りでしょう。魔都のはこれからですよ」＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜小料理店の二階の窓から外を眺めれば下界にも劣らぬ見事な花火が上がる。その度に人や獣など様々な姿をした妖怪たちが歓声を上げていた。＞ｂｒ＜「今年も見事なものだ」＞ｂｒ＜満足気に頷いて建御雷は酒を呷る。ふと視線を感じゼウスの方を見た。さすればどうしたものか、花火には見向きもせずにこちらを見つめている。＞ｂｒ＜「・・なに、か？」＞ｂｒ＜「花火よりもお前を見ていたいと思うのは我儘か・・？」＞ｂｒ＜真剣な表情でじっと見つめ、そんな事を言う。つい、視線を逸らしてしまった。再びそっと、ゼウスの方を窺えば、酒と肴に舌鼓を打っていた。それを良いことに建御雷はゼウスを観察していく。獅子のような黄金の髪に晴天の空を思わせる青い碧い瞳、なによりも異国を感じさせる彫の深い端正な顔立ちは小さなこの店からはひどく浮いていた。彼には白

亜の宮殿が似合うな、と思う。そして、ふとした瞬間に感じる気を抜けばのまれそうになる強い覇気に最高神の名は伊達では無いのだと気づかされ、自分のようなものが手を出していい領域では無いことを否が応でも突き付けられる。少し胸が痛んだ気がした。＞ｂｒ＜「終わったな」＞ｂｒ＜ゼウスの言葉にはっと外を見れば、さっきまで大輪の華に明るく照らされていた夜空はいつもの闇に戻り、街も解散を始めていた。＞ｂｒ＜「・・そうですね、出ましょうか」＞ｂｒ＜どちらの酒も空になっているのを見て建御雷は立ち上がった。勘定をすませ、店の外に出ると家へと向かう祭り客で通りは賑わっている。しかし、少し歩けば祭り客も減り、祭りの後の寂しさがあたりに漂っていた。＞ｂｒ＜「さてと・・・メインディッシュを頂くとするか」＞ｂｒ＜振り返ればゼウスが人の悪い笑みを浮かべている。反射的に警戒して一歩後ずさろうとした建御雷をたやすく捕まえると、軽々と抱き上げ、動きを封じ込めてしまった。そのあっけなさに建御雷は軍神としての自信を無くしそうになった。＞ｂｒ＜「そう固くなんなよ」＞ｂｒ＜「無茶言わんでくれますか」＞ｂｒ＜ゼウスが一歩、足を踏み出せば橋の上から一転して室内に変わる。ポイっと落とされた先は床の上では無く、ふかふかの大きなベットだった。のしかかって来るゼウスと自分の位置を反転させ、動けないように腕を押さえる。＞ｂｒ＜「帰してくれませんかね」＞ｂｒ＜ここはゼウスが日本に滞在する際に利用する洋館である。そのため、この中にものは全てゼウスの支配下にあり、それは建御雷とて例外ではなかった。力を使おうにも一定以上は主であるゼウスの許可が必要となり、自身の家まで転移することが出来ないでいた。油断した、と舌打ちをする。＞ｂｒ＜「誰が帰すか。お楽しみはこれからだろう？」＞ｂｒ＜にやりと笑ったゼウスの顔をハタと見た建御雷はあわてて身を引こうとした。それを逃がすほどゼウスも甘くは無い。押さえられていた腕を逆に掴み、逃げられないようにする。建御雷の顔を下から見上げれば悔しそうな表情を浮かべていて、さらに身を引きよせその唇に噛み付いた。＞ｂｒ＜「・・・・

・ッ、・・・・・・・・ふ、ァ・・・・・・・・ッ・・・・・」＞ｂｒ＜意識がそちらへ向いている間にさっさと帯をほどき、逃げられないように燃やしてしまった。腰紐も引き抜き、今度こそ組み敷いてやる。酒の酔いと口づけの余韻に瞳は強い快楽の色を示している。それでも耐えるように寄せる眉と非難するような強い眼差しはより一層ゼウスを高揚させた。＞ｂｒ＜「認めちまえ」＞ｂｒ＜「な、にを・・・・・ァ・・」＞ｂｒ＜日に焼けていない白い腿を撫で上げ、　つ…と舌先で忙しなく上下する喉を辿れば肩を掴む指に力がこもる。＞ｂｒ＜「ぐだぐだとくだらねぇ事で悩んでんじゃねぇよ」＞ｂｒ＜「・・・・・」＞ｂｒ＜「好きだって認めてしまえ・・建御雷」＞ｂｒ＜建御雷の頬を一筋の涙が伝う。＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜

月が笑った気がした。

葉月の頃（後書き）

どっちの月が笑ったんでしょうかねぇ。しかし、ほのぼのにならない。どうしてもシリアスになってしまう。

大山様：オオヤマヅノ神。日本の山の総元締をしてます。娘さんにサクヤコノハナヒメ命さん（桜の神様・富士山の神様）がいらっしゃいます。

月読様：月の神霊で、天照の弟でスサノオの兄さんです。占いや海の神様でもあります。

誤字脱字ありましたら遠慮なく指摘ください。ここまで読んでいただきありがとう御座います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5974m/

雷神の憂鬱

2010年10月15日21時23分発行